

所感2007

栗原誠一

湘南皮膚科（平塚市）



われわれの医会は昨年7月に創立40周年を迎え、記念の例会と趣向を凝らした懇親会でお祝いをしました。ご臨席いただいた来賓の諸先生諸氏にはこの場を借りて、会員に代わって厚く御礼申し上げます。また、記念会の何からなにまでを手作り手弁当でやり遂げてくれた実行委員や幹事をはじめ、会員の諸兄諸姉とは、医会が育ってゆく節目とともに祝うことが出来た喜びを分かち合いたいと思います。

さて、暫く前から学会や勉強会が多すぎて困るという声を耳にするようになりました。実際に、数え上げればすぐに十指を超える名称が浮かびます。大学や病院ならば専門の学会や院内の会合もあるでしょうし、開業医には医師会や地域での集まりが加わって、身体がいくつあっても足りないときもあります。会にはそれなりの目的や存在意義があって組織・運営されているのですが、神奈川県皮膚科医会はどのような状況にあっても格別な会であり続けて欲しいと思います。そうあるように育ててゆこうではありませんか。昭和61年に発行された20周年記念誌（会員名簿）には当医会の生い立ちが詳述されており、発会当初から進取の精神に富んだ企画力の旺盛な会であったことが窺われます。

医会はあくまでも個人の集合体だと思います。ひとつひとつの点が集まって線となり、やがて面を作り、三次元から四次元へと、緩やかな結合力で結びついている。その空間が医会という場だろうと考えています。縁あって神奈川の地でかわわりを持つことになった者どうしが、互いを束縛することなく、

自分の得たいものを求めて互いに影響しあうのです。自由意志に基づいた活動の場ですから、その内では政治力は働きませんし、官僚組織のような関係は存在しません。すべての会員が医会ライフをエンジョイし、出身校や立場を超えて互いに磨きあい助け合う、和やかな場を確保して、維持してゆきたいと思います。

幹事や委員会委員をはじめ、医会役員の皆様に負担をかけすぎているかと心配しています。医会で様々なかたから薫陶を受けているうちに、私の中には“役に立てる時は他人にサービスするのが当たり前”という思考回路が出来上がっています。会長に就任して“偉い先生”と紹介されてこそばゆい思いをすることがありますが、確認させて下さい。医会の役職に偉いものはありませんし、威張る場面など想像もつきません。幹事の役割を、医会の皆と一緒に楽しんだり、有益な情報や役立つ技術を仕入れて伝えるなど、直接の世話役とすれば、執行部は幹事のケアをする係ということになります。得られるものは、①考える楽しさ・企画する楽しさ、②喜ばれる楽しさ・感謝される楽しさ、③会得したこと・悟ったことを話す楽しさ、くらいのもので、いずれも一銭の得にもならない役回りですが、神皮会が夢と希望、使命感、向上心に溢れ、ますます楽しい会になるようお付き合いください。

私の夢を少し述べさせていただき、会長の挨拶とさせていただきます。

副会長に就任して

—神奈川県皮膚科医会との30年—



金丸哲山

金丸皮膚科（横須賀市）

医者になって30年になろうとしている。叔父、金丸三包先生に誘われて神奈川県皮膚科医会に初めて参加したのが30年前、その頃叔父は美食家で、かなり腹回りがあり、“これが哲山、お前の将来の姿だ”と諸先生にからかわれたものだった。叔父程ではないにしても中年になって私も腹が大分出てしまった。懇親会で諸先輩と知り合いになれるのがとても嬉しかったし、なにより薄給の身の私にとって懇親会で出される料理は今よりとてもおいしく感じられた。会のあと叔父はさらに“何か食べに行こう”と私を誘ってくれた。叔父の食欲には驚嘆するばかりだった。私はほとんどさらに食べる事ができなかった。これが神奈川県皮膚科医会と私の出会いである。私は叔父にとっても感謝している。もちろん勉強もした。当時は大学から例会の一般演題を募集していた。1978年、第37回例会で「ジューリング疱疹状皮膚炎を思わせた水疱症」と題して診断例を発表した。翌1979年は、第39回例会に勝岡憲生先生と共に「特異な臨床像を呈した伝染性軟属腫」という演題を発表した。この演題は翌1980年、「伝染性軟属腫、誤診例」という題で創刊間もない『皮膚病診療』第2巻、「イボをめぐって」の特集号に論文として発表された。日皮会東京地方会の、神奈川県分会が発足する以前であり、私達若い皮膚科医が演題を発表する場として神奈川県皮膚科医会はとても大切な場所であった。

その後大学での研究生生活、それに続いての海外留学等があり、神奈川県皮膚科医会とは疎遠になりつつあったが、父が他界し、故郷横須賀に国立横須賀病院皮膚科医長の職を得、戻ってからは再び神奈川県皮膚科医会に顔を出す様になった。専門医として若手の育成に毎日努力する日々が続いていた。丁度その頃、中野政男会長が勇退され加藤安彦幹事長がそのあとを引き継がれた。加藤会長の下では会計を担当させていただいた。私にとっては初めての重責であった。第11回日臨皮総会・臨床学術大会を加

藤先生がお引受けになり、その教育講演のオーガナイザーをまかされた。乾癬の新しい治療を小林仁先生に、最新のレーザー治療を大城俊夫先生に、最近の皮膚潰瘍（褥瘡）の治療を大原國章先生にお願いした。今から考えると良くできたものだと思うが、冷汗ものだった。またその頃日臨皮の行事としての「皮膚の日」のイベントが毎年11月12日前後に開催される事になり、神奈川の責任者をまかされた。無料皮膚病相談と講演会を毎年横浜そごうで開催していた。いろいろと加藤会長の下で経験を積みさせていただいた。その後大学も恩師西山茂夫先生が退職され勝岡教授の時代になった。勝岡先生とは大学時代から同級生の間柄だった事もあり、わがままを言って、関連病院の医長の職を辞し、開業させていただいた。会も加藤先生から原紀道先生に会長が引き継がれていった。原会長の下では企画委員長の重責をまかされた。各例会の企画を立案する委員会のまとめ役である。これまた大変な仕事だった。しかしながら不幸にも原先生が在任中に病に倒れられ他界、菅原信副会長があとを引き継がれた。菅原会長の下では引き続き企画委員長をおおせつかり、更には日臨皮南関東山静支部の事務局をまかされ多忙な日々となった。その時栗原誠一幹事長が誕生し、栗原先生の敏腕により神奈川県皮膚科医会が更に大きく成長したのは周知の事実である。

今回栗原会長の下で副として働かせていただく事になった。自分の持てるすべてのものを出して会長を支えて行こうと思っている。そして少しでも会の為に役に立ちたい。自分を今日まで育ててくれた神奈川県皮膚科医会に恩返しをしたい。そして更に立派な会にしたい。

以上まとめもなく神奈川県皮膚科医会と私の30年にわたる“かかわり”を述べてきたが、会も40周年を迎えた。更に50周年にむかって飛躍したいと思っている。

幹事長になってしまいました



鎌田英明

社会保険横浜中央病院（横浜市中区）

みんなで皮膚科を楽しみましょう！

こんなキャッチフレーズがびったりの40周年記念式典が賑々しく終わり、私の「神奈川県皮膚科医会幹事長」の生活が始まりました。栗原誠一先生から「もし私が会長に推薦された時には先生に幹事長をやってもらいたい。」と最初に言われたときは、「悪い冗談を！」と、まったく本気にしなかった私でした。

自慢ではありませんが（ならないか？）、どちらかといえばこの数年やっとまじめに例会に参加するようになった身です。それまでは「出席」のはがきを出しながらも「まあ一人ぐらい行かなくてもいいかな？」というノンポリ的存在で、勝手に「予定変更」していた身です。それが、毎回例会には必ず出席、というよりは例会自体を運営する立場になれということです。そんな話を気安く受けられるはずがありません。しかも、この神奈川県皮膚科医会には多士済々、私などよりも幹事長にふさわしい人材が山ほど居ることは誰の目にも明らかです。しかし、栗原会長候補は頑として許してくれませんでした。何度かの話し合いの後、栗原先生の神皮に対する熱い想いにもほだされ、「いっちょ、やってみるか！」という気になっていた私でした。それに、多士済々のスタッフがいる会ならば「幹事長」は交通整理のおまわりさんの働きで済むのではないかという、甘い考えも心の片隅にあったことも否定できません。

そして、いよいよ幹事長生活が始まりました。40周年記念式典の余韻に浸る間もなく、木花光新委員長の企画委員会が待ち構えていて、次の第122回例会はおろか、3年先の平成21年の例会のことが話し合われる世界です。その後も、毎週のように産業医委員会、野村有子委員長の広報委員会、浅井俊弥委員長のIT勉強会、川口博史委員長の編集委員会、袋秀平委員長の在宅勉強会と、例会以外にも会が目

白押しで、その上に医師会への報告やら、会議のセッティングやらと「こんなにいろいろあるのか！」と半ば嘆息する日々が始まりました。「多士済々」なだけにいずれの委員会も中身の濃い、素晴らしい企画が続出し、交通整理どころか自分の役回りと立ち位置を把握するナビが欲しいくらいの毎日の始まりでした。

2年ほど前に日臨皮が各地方の皮膚科医会について調査した詳細な資料がありますが、我が神奈川県皮膚科医会は東京都に次いで多い500余名の会員数を誇る会です。人数ばかりではなく、その中身の濃さにおいても他県の先生方から賞賛と注目をいただいております。一昨年の日臨皮総会でも、我が医会に託された企画を「タバコと皮膚」で見事にクリアしてみせました。赤レンガ倉庫を会場に行われる神奈川県皮膚科医会「皮膚の日」行事も一つの定着したイベントになりつつありますし、コメディカルの方々の参加が年々増えていると聞く「在宅医療勉強会」も医会の啓発事業として認知されてきています。

よく「神奈川のアクティビティの高さはどこに源があるの？」と他県の先生方に聞かれます。それは先輩諸先生方によって培われた伝統を継承しつつも、それに甘んじることなく新たな発想と挑戦に、前述した「多士済々」の面々が力をフルに発揮されているからに他ならないと思います。

こうした伝統とパワフルな炎とを絶やすことなく次代の神奈川県皮膚科医会に引き継いで行くため、栗原会長の下、活動しやすい医会環境を整えて行くことこそが私に課せられた重要な使命ではないかと思いはじめた今日この頃です。

頼りない幹事長ですが、今後ともよろしく願い申し上げます。